弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

看護学部・看護学科
大瀬　富士子

作成日　2023年10月14日

1. 教育の責務

2017年（平成29年）10月より看護学部に採用され2023年で6年間勤務し7年目となった。主に母性看護学領域を中心として講義や実習科目を担当している。助産師としての長い臨床経験と助産師教育を12年6か月行ってきたことを基盤としている

講義以外では、3月まで5年間学生主任として、主に学生委員会・就職委員会を担当し、豊かな学生生活の支援を中心として活動してきた。他に学生委員会としての初年次教育、チューター制度を立ち上げ、新入生・在校生オリエンテーション、卒業生を送る会など行事を計画実施してきた。またコロナ禍では大学の方針を元に看護学部の感染対策を担った。就職委員会では、就職活動の支援を学生と対面で個別に行ってきた。

その他、カリキュラム検討委員会でカリキュラムの作成に携わった。リカレント委員会の企画運営、FD委員会講演会企画運営、国家試験対策委員会など委員会活動を行った。

2023年度担当授業

科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
母性看護学概論	2年	講義	前期	基盤となる概念
母性看護方法論	2年	講義	後期	妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の基礎的知識、異常を判断できる力と看護
母性看護援助論	3年	演習	前期	妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の技術、理論と演習
リプロダクティブヘルス/ライツ	2年	講義	後期	プレコンセプションヘルス、遺伝看護など主に倫理的問題
次世代育成ケア論	2年	講義	後期	明治時代の日本の子育てなど
研究方法論	3年	講義	前期	文献検索・文献検討
家族看護学	2年	講義	後期	家族のレジリエンスなど
地域研究B	1年	講義	前期	文学部、社会福祉学部講義
卒業研究	4年	論文指導	通年	母性看護学
母性看護学実習	3～4年	実習	通年	母性看護学
看護統合実習	4年	実習	前期	母性看護学
健康づくり実習Ⅰ	1年	実習	前期	早期体験実習、地域を知る

2. 教育の理念

私が大切にしていることは、「明るく・優しく・しっかりと」をモットーに、学生達の思いやりの心を育てたいと考えている。看護職である以前に人として優しい心を持ってほしい。優しさは芯の強さでもあると考える。大変な状況にある方々を対象とする看護職は、心の底から思いやることで私たちのなすべきことが見えてくると信じている。

また「一生懸命は知恵が湧く」も大切にしている。努力した時に知恵が湧く楽しさを感じて、毎日いろいろな発見があり楽しいと思えたら良いと考える。

教育の中核にあるものは生命倫理である。白か黒かでは決められないことを皆で話し合い合意していく。そのプロセスを学生にも話し合い学んでもらう。ただし自分の思いを明らかにすることで倫理的問題が生じないように、現象学的に自分の意見、主体の思いを一旦脇に置き（現象学的還元/エポケー）話し合ってもらう。対象となる客体の考えが見えてくると考える。

医学にしても看護にしても、エビデンスが変わればケアも大きく変わることを臨床で経験してきた。学生達には、いつでも「これで良いのか」という批判的思考を持ち、当たり前に慣れすぎないことを伝えている。「わからなくなったら自然のあり方が教えてくれると信じている」ことも伝えている。

多くの社会問題に触れ、常に困っている方を支え、人が嫌がることはしないなど、看護職者として、人として熟慮してほしいと願っている。

ＳＤＧｓの「leave no one behind」誰ひとり取り残されないという理念は、学生一人一人を大切にする理念でもあると考える。勉学、学生生活が豊かである様にと願っている。困っている学生がいたら一人一人に細やかに接していきたいと考えている。

卒業してからは看護職として、誇りをもって、精一杯対象となる方々に看護してほしい。自分でできなかったことや多くの思いがあり、学生達へ伝えていきたい。

3. 教育の方法

科目により異なる。「母性看護方法論」では、看護職として正常な経過、異常な経過を判断できることは重要であるため、知識を身に着けさせる。「母性看護援助論」では知識を活用して、さらに妊婦健康診査や分娩期の看護、産褥期の看護、新生児期の看護、新生児蘇生、胎児心拍モニタリングなどの講義後に、模擬的環境での実際の技術訓練を行う。

「母性看護学概論」「リプロダクティブヘルス・ライツ」では、母性の概念はグループワークで発表。法律、統計、解剖、生理、歴史、さらに母性領域では社会的問題も多いため、虐待、ＤＶ、プレコンセプションヘルス、胎児に障がいをもつこと出生前診断、不妊看護、望まない妊娠を避ける、国際的な女性子どもの問題、セクシュアリティ、多様性、性暴力、婦人科看護など。講義形式が多いが、上記で示した倫理的配慮をしたうえでペアワークを取り入れている。

「次世代育成ケア論」は選択科目であり、明治時代の日本、おむつなし育児、母乳育児の歴史、地域で産み育てることなど、著書や研究を元に伝えている。育児を教えているのではなく、例えばおむつなし育児では、対象となる方のサインに気づき、ナースコールを鳴らさない看護に気づく学生もいる。授業シートで振り返ってもらっている。

「卒業研究」は、卒業後に研究できる力を養うために、可能であれば量的研究、質的研究を勧めている。学生の希望を最優先し、学生が取り組みたいテーマで、個々の状況に合わせて進めている。学生が時には1,000人近い方を対象として計画することもあり、力を合わせてデータを収集したりしている。

「母性看護学実習」では、知識・演習をもとに臨床現場での学びは大きい。情報を元にアセスメントできる力、それを表現する力を養う。

4. 教育の成果

授業評価アンケートおよび自己評価（学修自己成長表）の結果を示す。

1. 講義について
回答率98.0%の科目で、ほとんど平均値より高かった。

①　教員に対する評価」に関して
「教員は熱意を持って授業に臨んでいる」「学生の意見や質問に対して適切に対応している」3.9（4点満点）で、93.8%が4（4点満点）であった。

②「授業内容」に対して
「この授業から、新しい知識や技能、専門的な考え方、発想を学ぶことができる」3.9
「教科書、資料、板書は授業内容の理解に役立っている」3.9
「総合的にみて、この授業に満足している」3.8
　全学・学部の平均値よりも高かった。

③「学生自身の自己評価に関して」
「シラバスに記載されている到達目標や評価方法を知っている」は3.7（4点満点）で平均より高かったが、「事前学習（予習）・事後学習（復習）に取り組んでいる」が3.2で0.1学部平均より低かった。

2. 実習について
　学生授業評価では、すべての項目が学部平均より高かった。
「教員の熱意を持って臨んでいる」は3.9と90.4%が4であった。
「この授業から、新しい知識や技能、専門的な考え方、発想を学ぶことができる」3.85

5. 教育の改善

概ね教育の成果はあったと考える。以下に改善すべき点を記す。良いところは続けたい。

1. 熱意は良く伝わっていて励みとなるため、今後も精一杯努力していきたい。
　また、学生の意見や質問に適切に対応しているについても励みになる評価であるため、続けていきたい。

2. 課題は多く出さない方針で行ってきたため、事前学習（予習）事後学習（復習）の評価が低めである。学生の負担にならないようにして学習効果の上がる工夫をしたい。

3. シラバスの記載目標達成について、まさに目標で理想的な内容を高く掲げていたが、目標を少し低くして、現実的に達成できるものを掲げるべきかもしれない。

6. 教育の目標

教育の目標を達成可能なものとして見直す。
グループワーク、ペアワークも取り入れているが講義形式も多いため、学生が主体的に知識を得て、アセスメント力、実践力を持たせたい。
大学生は入職後に時間が経ってから後で伸びるとされているが、その言葉に甘んじることなく、実践力のある看護職として活動できるように卒業させたい。
学部においてカリキュラム全体のアクティブラーニング化など、一教員、一科目の工夫にとどまらず、学部全体で統一した共通の目標を持つ必要があると考える。

【資料】

1. シラバス
2. 授業評価アンケート
3. 定期試験結果
4. 学生提出の課題レポート
5. 演習事前学習
6. 授業改善書